

花の上野公園－補遺

藤原 道夫

東京国立博物館では、例年3月中旬～4月中旬に「博物館でお花見を」という催しが行われる。屏風絵や浮世絵、花瓶などの器、甲冑や刀の鍔など桜花が扱われているものが展示される。それぞれ展示室が異なるので本館を一通り見ることになる。今年は「観桜図屏風」「飛鳥山花見」「色絵桜樹透鉢」（いずれも江戸時代）などが展示されていた。以前にも見た作品ばかりだったが、桜の季節に再度鑑賞できるのはよいことだ。

この期間に博物館の裏庭も開放される。庭に向かうと先ず**帝吉野**に出あう。これは科学博物館裏の**天城吉野**とともに、**染井吉野**の親を探る交配実験の過程でできた白い花を咲かせる品種。両者とも**オオシマザクラ**が母、**エドヒガン**が父となって作出された。他の交配実験から染井吉野の母親はエドヒガン、父親はオオシマザクラであることが分かった。

染井吉野が出回る前、上野の桜は**ヤマザクラ**が主だった。それらは吉野から贈られたという記録があるとか。花は吉野・・・江戸に住む人たちの憧れはこんなところに由来するのだろう。江戸時代後期から明治になって、桜の主役は染井吉野にとって代わった。上野公園が整備されてから130年目を記念してまたも吉野の金峯山寺からヤマザクラが贈られ、公園の一角で大事そうに育てられている。貴公子然としているものの、もはや主役にはなれまい。

八重紅枝垂は病原体に弱いせいか、大きく育った木はめったに見られない。清水観音堂の横にある木は大きくはないものの美しく花を咲かせていた。それが大部分枯れてしまった。同じことを北の丸公園でも体験した。乾門近くにあった2本の木は、濃い目の薄紅色の花を咲かせて優雅な趣があった。この春3年ぶりに行ってみたところ、2本とも枯れていた。

上野公園の一角で美しい花を付ける**舞姫**は、「日本花の会」の創設50周年を記念して植えられた。木の傍らにいた数人の若者は、この桜の由来の説明を聞いていたのだろう。「日本花の会」は、60年前全国に桜を主にして花を楽しむことができる公園を増やそうという趣旨で設立された。結城市（茨城県）郊外に広大な農場と称する土地を保有しており、多くの桜の品種が植えられている。舞姫はここの農場で作出された。

不忍池の周りにも染井吉野の並木があり、また多くの品種の桜が植えられていて目を楽しませてくれる。この春には**雛菊桜**や**永源寺**といった珍しい桜に出あった。

花の上野公園ぶらぶら歩きは、行ける限り実行してみたい。行くたびにちょっとした発見がある。また、桜に関連してさまざまなことが脳裡をよぎる。また楽しからずや。